上州文化

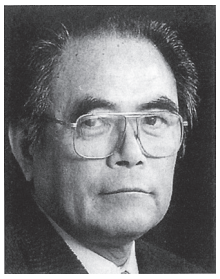
contents

巻頭言／永井金四郎 ②
特集 ぐんまミュージアム散歩／桑原高良 ③
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
群馬県教育文化事業団 INFORMATION ⑩
地域文化をつなぐ／森谷武竝 ⑪
ART NOW 「警告！地球人類に物申す」／きんとき星流 ⑫
カフェの隅から 小さな歓声／竹田朋子 ⑭

「月華」 永井 金四郎

公益財団法人 群馬県教育文化事業団 2013 No.134

巻頭言　連盟と共に歩んで



群馬美術家連盟 名誉顧問　永井金四郎

六十二歳を迎えた連盟展は、充実期という山をめざして今、力強く登っています。

昭和二十六年、川隅路之助、遠藤燦果ら十二名により群馬美術家連盟が結成された事は周知の事と思いますが、六十余年を堅実に歩み続け、多くの作家との交流を重ねつつ、豊かな人間性や創造性を育み、人間相互の連帯感を生み出し歩んできた道程は、限り無い薫陶を受けて来たと言えましょう。

戦後、日本の経済が著しく向上し、世界的な平穏の中で東西の文化が交流し、居ながらにして外国の名画が見られる様になり、海外に流出した日本美術の名品の里帰り等もあり有難い事だと思いますが、私共絵を志す者にとりましては、心の底から感銘を受ける様な作品に出合う事はめったにないと思います。

私共日本人は東洋の美術について、相当深いところまで理解出来ると思いますが、西洋人はどこまで理解出来るか計り知れません。

また、逆に西洋美術の真の理解も我々には難しいところがあります。

西洋の文明が入り込んで来て百年余り、生活様式も文芸も科学も世界はつながり、国際交流なしでは一日も生きて行けない現在、美術の面においても外国の影響が果てしなく続いています。考えてみれば有難い時代かも知れないが、しかし別の考えでは我が国独自の個性は段々失われて行っている様にも思われます。

私が連盟に作品を出し始めたのは四回展からであり、当時は抽象画全盛期であり、老いも若きも抽象に取り組み、前衛という渦に巻き込まれて、抽象的な面白さに翻弄された時代でもありました。しかしそれにより表現の幅が広がり、独自な作品が生まれる様になったとも言えるかもしれません。

人は新しきに集まり、蟻は甘きに集まると言う格言がありますが、連盟は今、新しき世代を迎えて大きく変わろうとしています。

連盟の伝統文化を大切に継承しつつ、新しい文化をどう為すべきかと、明日への指針を模索する時期に来ているものと思います。

その時代時代に生きた人々の心を大切にしながら、勇気を持って明日にも参加するであろう若い人達のために、新しい文化を築く信念を持って、群馬の文化振興のために努力することこそ私達の使命と言えましょう。

ぐんまミュージアム散歩

群馬の文学資料を網羅
講座や文学全集出版も

⑥「群馬県立土屋文明記念文学館」

桑原高良

榛名山を望む高崎市北部、旧群馬町の地に県立の文学館がある。地元出身の歌人で文化勲章受章者、名誉県民、土屋文明の名を冠した県立土屋文明記念文学館（篠木れい子館長）だ。初代館長で詩人の伊藤信吉氏の尽力もあり、小説や詩、短歌、俳句、随筆や評論など群馬ゆかりの文学資料を幅広く収集所蔵、それをもとに企画展や常設展示を行ってきた。さらに群馬文学全集（全20巻）の出版を企画するなど特筆される活動でも知られる。県立文学館の〝今〟を取材した。

榛名山麓の古墳群地域、上毛野はにわの里公園の一角に、群馬県立土屋文明記念文学館はある。詩人、歌人、俳人から小説家まで多くの文学者を生んだ群馬の貴重な資料を収集・保存、研究、展示する施設だ。

1996（平成八）年七月の開館。地元出身の歌人、土屋文明の遺族から寄贈された資料などをもとに誕生した。その背景には、長年にわたり群馬ペンクラブなどが取り組んできた県立文学館建設運動があった。文学拠点の完成は、多くの資料寄贈の動きも加速させ、現在の所蔵資料は約十九万点にも達している。

文学館ならではの作家やテーマ別の企画展示に力を入れており、昨年度までに企画展が七十回以上、特別展示三十三回の実績がある。いずれの展示も、伊藤信吉初代館長がこだわった「未来へ語り継ぐ文学」「本物を公開する文学館」のポリシーが確実に貫かれている。

土屋文明の歌碑

館内に移築された書斎も

◇歴史と文化に支えられ

榛名山を遠望する地に建つ同館を訪ねてみた。広い敷地、芝生広場が施設前に広がり、来館者を迎える。入館する前に、敷地内前庭にある文学碑の見学もしておきたい。駐車場近くの公園部分に土屋文明の「青き上に　榛名を永久の幻に　出でて帰らぬ　我のみにあらじ」の歌が刻まれた歌碑や《いちめんのなのはな　いちめんのなのはな…》が繰り返される山村暮鳥の「風景　純銀もざいく」の詩碑などが設置されている。二人とも地域（旧群馬町）ゆかりの文学者だ。

広場の先にある文学館の形状は、隣接する保渡田古墳群に溶け込むように、古墳のような形をしている。

館内に入ると、吹き抜けのエントランスが出迎える。右側に土屋文明の生涯を作品などで紹介する常設展示室、好みの文学関係映像が楽しめる映像展示室が設けられている。このゾーンでは、文学や郷土作家に関心を持ってもらう工夫がされている。

文明ファンにはたまらないのが、都内から移築された書斎。創作活動の場であったこの書斎を眺めていると、今にも作家本人が現れそうな錯覚に陥る。

◇「襄と八重の上州」

企画展示室は、エントランスの左手にある。平成二十五年度事業として六月十六日まで新島襄生誕170年記念

企画展入口には関連書籍も

「襄と八重の上州　新島襄がこの地に播いた種」が開催されている。幕末から明治にかけての動乱・混乱期を個性的に生き、同志社英学校開設にこぎつけた新島襄と八重、二人と群馬とのかかわり、影響を受けた人々などにスポットを当てたもの。展示されている書簡などからは、二人の人となりもうかがえる。ＮＨＫ大河ドラマの人気もあり、入場者も多くなっている。同展担当の木村一実学芸係長は、「県内から貴重な資料が提供されています。二人は群馬には住んでいませんでしたが、資料から深い絆があったことがうかがえます」と解説している。

次回企画展（七月十三日から九月十六日）は、高崎にあった文化拠点、名曲茶房「あすなろ」に集った詩人たちを紹介する予定だという。

◇館長講座や自主学習会

同館では、講座や自主学習にも積極的だ。篠木れい子館長は、昨年の就任以来、館長講座を行っている。初年度は五回にわたり館長専門分野である「ことば」にこだわり、文学とのかかわりに言及した内容を講義した。本年度は春の館長講座として古代から現代までの日本語の歴史に、音と文字の側面から迫る講義を企画（五月十六日、六月十三日）。

また、文学に親しむための自主学習会を年十回程度開催している。対象ジャンルは、短歌、俳句、詩、古典、絵手紙などで、それぞれの専門家が講師となっているため人気が高いという。

小学生のための短歌教室、夏休み中の同館での紙芝居上演や読み聞かせなど、次代を担う若者たちへの取り組みも盛んだ。一階正面奥には、子供たち向けの創作絵本が並ぶ「絵本のひろば」も設けられている。靴を脱いでゆっくりと楽しむことができるように、じゅうたんが敷かれ、ゆっくりと読書する子供の姿も見られる。

にぎわう企画展会場

◇評価高い文学全集

同館を語る上で特筆されるのが『群馬文学全集』（全二十巻）の発行。伊藤信吉初代館長が監修し、群馬ゆかりの作家や文学作品を網羅したもので、１９９９（平成十一）年から五年間にわたって刊行された。

田山花袋や土屋文明、村上鬼城、山村暮鳥、萩原朔太郎、萩原恭次郎、伊藤信吉、司修の文学者から多くの群馬の歌人、俳人、小説家、詩人や評論家などを幅広く収め、県内外から高い評価を得た。

◇売店やレストランも

館内のミュージアムショップでは、オリジナルの一筆箋や封筒、土屋文明の色紙、絵はがきアルバムなどのほか、企画展関連書籍やグッズなどを扱っている。文学全集の問い合わせにも応じている。

来館者が、見学後や昼時に利用しているのが、二階にある「農家れすとらん『菜花』」。新鮮な地元野菜などを使ったヘルシーな弁当類やお漬物、お茶やデザートを楽しむことができる。運営に当たっているのは農事組合法人「国府野菜本舗」の人たち。食事を楽しみながら周囲の景色を楽しむこともできる。食事のみでの利用もできる。

ミュージアムショップ

「県立土屋文明記念文学館」

〒 370-3533　高崎市保渡田町 2000
☎ 027-373-7721　Fax 027-373-7725
tsuchiyakan@pref.gunma.lg.jp
開館時間：午前９時 30 分～午後５時
（観覧受付は４時 30 分まで）
休館日：火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、燻蒸などの臨時休館日
入館料：一般 200 円、大学・高校生 100 円、中学生以下無料（企画展は特別料金）

篠木れい子館長に聞く

「文学館の魅力を次世代に」

―七代目館長に昨年五月就任、一年が経過した。研究者から館長職に移られての思いは。

篠木　就任のお話があった時、本当は悩んだのです。それまで言語研究、日本語研究をしてきた私が、県立の文学館長に就任していいのだろうかと迷いました。文学研究を専門にしてきたわけではないのですから。

　ただこれまでの館長の方には県庁出身の人もおられ運営にあたっていたのも事実。私も県職員、たまたま県立女子大の文学部教授（学部長）という職にいたわけですので、縁もないわけではありませんでした。大学では周囲に文学研究者も多く、さまざまな時代の文学を研究していました。この人たちとの交流もありました。

　さらに言えば、私の研究は音声など言葉の音の部分から入り、その後、徐々に語彙、言葉の意味論などに移ってきました。そこには人間の営みがあり、言葉の背後には歴史も地域も生活文化も、名も無き多くの人々の心も全て入り込んでいます。詩や小説も言葉をつむぎ感動させる作業、日常の生活でも言葉は重要で、それによって共感や感動を生みます。私のやってきたことも、その意味では文学とも繋がっている、という風に自分で理解してこの職を引き受けたのです。

「若い世代も文学館に来てほしい」と語る篠木館長

―初代館長、伊藤信吉氏との縁もあったのでは。

篠木　そうです。最も重要なのは初代館長の伊藤信吉先生との関係です。この館のお話があったとき、伊藤先生との出会いや楽しかった日々を思い出し、先生が私をここに呼んでくださったのかと思いました。

　伊藤先生の作品に出会い、大きな衝撃を受けました。「私たち方言研究者は一体何をしていたのだろうか」と思いました。先生の作品からは、人々の暮らしが映像となって瞬間に動き出し、肉声が聞こえるんですね。私たちは、学問のレベルを高めたり、言語の成り立ちや構成を考えたりはしていただろうけれど、人々の生活や心の内までその思いは至っていただろうかと考えさせられたのです。そのことがあってから、私の言葉の研究も変わってきました。先生の作品には、言葉にリズムがあるのです。

―研究者として、館長として今後どう館と関わっていくのか。

篠木　言葉は人間の生き方、営みに繋がってきます。昨年から私は館長講座の中で、その点を伝えてきました。それが分かると、皆さんが使っている言葉がどういう意味をもっているか、どういう文学作品と関連があるかということになります。文学と言葉の関係をうまく理解してもらえればと語ってきました。館長講座は本年度も開講します。私が出来ることは、やはり文学は面白いものだということを次の世代に、若い人たちにも伝えていくことだと思っています。ここ（館）に来て、本物の資料に接し、多くの先人について知り、貴重なお話を聴く。こんなすてきな出会いを共有してほしいですね。

　私自身は、伊藤先生の志や息吹を感じながら、群馬の文学がいっぱい詰まったこの「宝物」（文学館）を大切にしていきたいと考えています。その意味でも、もっと職員の人たちとともに勉強し、言語学や方言研究として扱っていたものとも繋がっているであろう文学の世界に、手を伸ばしていきたいと思っています。

◎館長おすすめポイント

歴史遺産を背に

　文学館のあるこの地域は環境が素晴らしい。美しい山容の榛名山は東歌に多く詠まれ、その山麓には貴重な古墳群があり、まさに歴史的、文化的環境に恵まれています。館長室の窓からは、隣接し復元された石葺きの八幡塚古墳がその素晴らしい姿を毎日見せてくれます＝**写真**。歴史のエネルギーを背中に受けながら仕事をしている感じになります。本当にぜいたくな環境だと思います。

桑　原　高　良
（くわばら　たかよし）

群馬ペンクラブ会員、群馬県文学会議会員。

1950年生まれ。74年に上毛新聞社入社。藤岡支局長、前橋支局長、編集局文化生活部長、出版局次長、文化情報誌「上州風」編集長、編集局次長などを経て太田支社長。館林シャトルおよび高崎タカタイの編集長。2011年3月退職。現在、中央カレッジグループ学園新聞編集長。著書に『二足の草鞋と本音人生―聞き書き大川栄二』『わがこころ語る上州人　塩原友子』『初代コロムビア・ローズ物語―人生は歌とともに』（いずれも上毛新聞社刊）。

上野東歌探訪

(13)

北川和秀　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

一、誤植の上塗り（前号の事情説明）

前々号に生じた誤植のお詫びを前号でしたところ、そのお詫びの文中に誤植が生じてしまった。東歌そのものに関することではないので、そのままにすることも考えたが、前号の読者の皆さまに意味不明の文をお届けしたままというのもいかがなものかと思い直し、簡単に事情を説明することとしたい。

発端は、前々号に「⑱～〓（丸囲みの22・作字）の五基」という誤植が生じたことにある。本来は「⑱～㉒の五基」とあるべきものである。ＪＩＳの文字コードに丸囲みの数字は⑳までしかなく、㉑以上は作字になるので、編集担当者にその旨を伝えようとして、「⑱～〓（丸囲みの22・作字）」と指示をした。ところが、その指示がそのまま誌面になってしまったのである。

そこで、次の号（前号）に、「前号の最後の段落に「⑱～〓（丸囲みの22・作字）の五基」という大変に無様な誤植が生じている。これは当然「⑱～㉒の五基」とあるべきものである。」と書いた。初校ではその通りになっていた。初校に何ヶ所か赤を入れて戻し、やがて返ってきた再校で、初校の赤字部分のみを確認して校了にしたところ、発行された誌面では、ここが「前号の最後の段落に「⑱～㉒の五基」という大変に無様な誤植が生じている。これは当然「⑱～㉒の五基」とあるべきものである。」という意味不明な文になっていた。驚いて再校を確認したところ、再校もこの通りの文であった。つまり、初校で私が赤を入れなかった部分が勝手に改変されていたのである。赤字部分しか再校を確認しなかった私の責任ではあるが、まさか著者に無断でこのような改変がなされていようとは思いもよらないことであった。

二号に及ぶ失態をお詫びするとともに、今度こそこれで解決としたい。

前号では、性愛に対する激しい心情を率直かつ大胆に表現している歌を取り上げた。東歌らしい歌ではあるが、東歌はそういう歌ばかりではない。今回は、純情な思いをうたった歌三首をよむことにする。以下の三首である。

◎利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）
◎左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）
◎真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）

二、「利根川の」の歌

利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）

刀祢河泊乃　可波世毛思良受　多太和多里　奈美尓安布能須
安敝流伎美可母

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けたように、突然ばったりと出会ったあなただこと。

「川瀬」は川が浅くなっているところ。橋や船を使わずに徒歩で川を渡るにはそういう場所を利用する。この歌によまれている利根川は、そこそこの上流で、徒歩で渡ることは可能でも、ある程度の川幅や深さがあるような地点なのであろう。写真は、みなかみ町役場の裏手を下っていったあたりの利根川である。

この付近は、川幅は四〇～五〇メートルほどあるが、昭和の初期の頃まで対岸への渡船場として浅瀬があって、古来「徒渉」と呼ばれ、徒歩で対岸に渡れたという。利根川の歌もこのような場所をうたったものであろう。「直」はまっすぐ。「のす」は「なす」の東国方言形で、「～のように」。「なす」の例は万葉集に六十余例ある。次のような例である。

・……波のむた　か寄りかく寄り　玉藻なす　寄り寝し妹を……
（二・一三一）柿本人麻呂
（……波とともにあちらへ寄りこちらへ寄る美しい藻のように、私に寄り添って寝た妻を……）

・み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも
（四・四九六）柿本人麻呂
（熊野の海岸に生えている浜木綿のように、幾重にも深く心には思っているが、直接には逢わないことだ）

一方、「のす」は八例あり、すべて東歌または防人歌であるので、東国方言であることが知られる。次のような例がある。

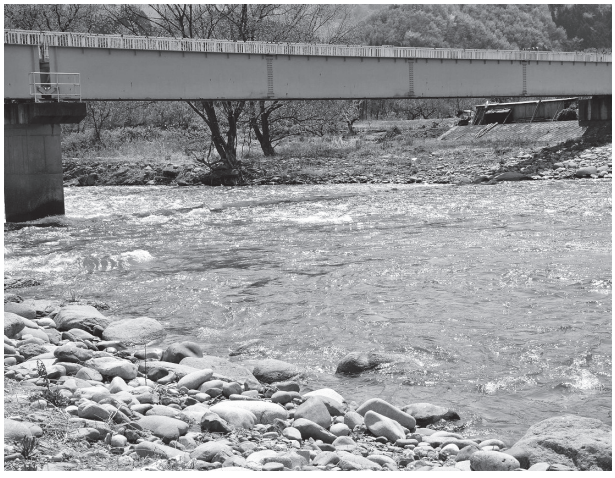
・下毛野みかもの山のこ楢のすまぐはし子ろは誰が笥か持たむ
（一四・三四二四）下野国東歌
（下野国の三毳山に生えている小楢のように美しいあの娘は誰の食器を持つのだろう〈＝誰の妻になるのだろう〉）

・高き嶺に雲のつくのす我れさへに君につきなな高嶺と思ひて
（一四・三五一四）未勘国東歌
（高い嶺に雲が寄り添うように、私もあなたに寄り添いたい。あなたを高嶺と思って）

利根川の歌に戻って、万葉集の特に相聞歌では、「君」は女が男に対して用いる語であるから、この歌は女の作であることが分かる。一句目から四句目までは、末句の「会へる」の比喩になっている。全く予期せずに男と偶然に出会った女の驚きをこのような比喩でうたったもの。女はかねてからこの男に心を寄せていたのであろう。それが、全く突然にこの男と遭遇し、嬉しいよりも先にびっくりしてしまった。話しかけることもできず、向こうから話しかけられても満足な応答もできなかったことであろう。そういう初々しい歌である。

この女はかつて、急いでいるかして、普段はする利根川の瀬踏みをせずに、構わず川を渡ろうとして突然に波を受けてびっくりした経験があったのであろう。全く予期せずに男と遭遇してびっくりした。どんなにびっくりしたかを述べるにあたって、そのかつての体験を比喩として持ち出したものと思われる。川の中で男と遭遇したわけでない。日常生活での体験を歌によみこんだわけで、そういう、生活に密着した内容をよんでいるという点では、この歌も東歌らしい歌といえる。

もう1枚の写真は、前述の「徒渉」付近にある万葉歌碑であり、この歌が刻まれている。昭和九年の建碑である。


利根川「徒渉」付近

「利根川の」歌碑

三、「さわたりの」の歌

左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）
左和多里能　手児尓伊由伎安比　安可故麻我　安我伎乎波夜美
許等登波受伎奴

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまった。

この歌は国名不明の部に収められている。「左和多里」は地名。群馬県吾妻郡中之条町に上沢渡・下沢渡があり、上沢渡には沢渡温泉がある。そこの可能性はあるが、この沢渡の地名は、現在のところ文献的には安土桃山時代までしか遡れないので、ここかどうか確実ではない。

「手児」は東国語で、愛しい女性、少女、乙女。「手児名」という語形もある。複数の男性に求婚され、進退窮まってみずから命を絶ったという下総国の「葛飾の真間の手児名」が有名。万葉集には、「地名＋手児」という形では信濃国東歌に「埴科の石井の手児」（一四・三三九八）が見える。

「乙女」ではなく「幼子」の意味で使われた次のような例がある。

・剣大刀身に添ふ妹をとり見がね哭をそ泣きつる手児にあらなくに
（一四・三四八五）未勘国東歌

「剣大刀」は「身に添ふ」にかかる枕詞。「とり見」は世話をすること、介抱すること。歌の意味は、「私に寄り添う彼女をやさしく介抱しかねて、声を上げて泣いてしまった。幼子でもないのに」ということであろう。どういう状況かはっきりしないが、この歌では「手児」は幼子（あるいは赤ん坊）の意で用いられている。どうやら、「手児」の原義は、「手の中に大切に包み込んでいつくしむ幼子」ということなのであろう。そこから「いとしい女性」の意に転じたものと思われる。

「い行き逢ひ」の「い」は動詞に付く接頭語。語調を整えるために付く、と説かれることが多いが、「い及く」（追いかけていって追いつく）、「い行く」、「い行き憚る」、「い渡る」など、移動に関する動詞に付くことが多い。

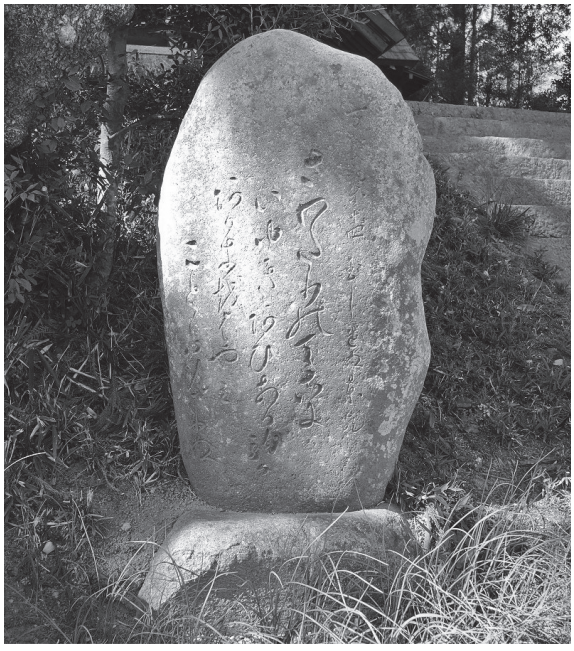
「足掻く」は、馬や牛が足で地面を掻いて進むこと。牛や馬が歩むこと。「足掻き」はその名詞形。「～を速み」は「～が速いので」。「瀬を速み」などと同じ語法。

「言問ふ」はものを言うこと、言葉を交わすこと。

「左和多里の手児」はこのあたりの男達にとってアイドル的存在なのであろう。その乙女に折角遭遇できたのに、何も言葉を交わすことができなかった。その理由を、自分が乗った馬の歩みが速かったせいにしている。しかし、自分が乗っている馬くらい、制禦できそうなものである。本当は、気後れして言葉を掛けそびれたのであろう。誰かに言い訳をしているような歌である。

「俺さぁ、さっき左和多里の手児に行き会ったんだぜ！」「えっ！　すげーじゃん。そいで、どうした」「話しかけたかったんだけど、アカ（馬の名前・仮称）の奴がさっさと行っちまうもんで、なんも言えなかった」「何だよ、それ」といった、悪友とのやりとりの情景が目に浮かぶ。この会話は、『万葉集全注』（水島義治氏）を参考に想像してみたものであるが、私の周囲には若い男子がいないので、会話のリアリティには自信がもてない。

連載の第二回目（『上州文化』一二三号）で、「伊


「左和多里の」歌碑

香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）」（伊香保の峰に雷よ鳴ってくれるな。私の身にはそう願う理由はないけれども、あの娘が怖がるものでね）という歌を取り上げた。この歌の「吾が上には故はなけども」という部分も、独り言ではなく、誰かに言い訳をしているような趣であり、共通性を感じる。これらは、東歌が集団的性格を有していることと関わる特徴といえよう。

写真は、吾妻郡中之条町の沢渡神社にある万葉歌碑で、この歌が刻んである。建碑者は丸本旅館当主の福田六右衛門。富田永世『上野温泉廻』（文政十一年〈一八二八〉成）にこの歌碑のことが載っている由であるが、未見である。是非確認したく思っている。もし載っているなら、この歌碑は文政十年建碑の佐野の舟橋の碑よりも古い可能性があり、県内現存最古の万葉歌碑といえよう。

四、丹生の真朱の歌

真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）

麻可祢布久　尓布能麻曽保乃　伊呂尓弖弖　伊波奈久能未曽
安我古布良久波

丹生の赤土のようには、はっきりと表に出して言わないだけだ。私があなたに恋しているということは。

「真金」は鉄。「吹く」は金属を精錬すること。「丹」は赤土、また辰砂（水銀と硫黄の化合物）。「丹生」は辰砂などを含む赤土を産する地の地名。「真金ふく」は「丹生」や「吉備」にかかる枕詞。吉備は鉄の産地である。

丹生という地名は各地にある。郡名に若狭国小丹生郡、越前国丹生郡があり、郡の下の単位である郷里名に伊勢国飯高郡丹生郷、近江国坂田郡下丹生里、上野国甘楽郡丹生郷、若狭国遠敷郡丹生郷、越前国丹生郡丹生郷、土左国安芸郡丹生郷、豊後国海部郡丹生郷がある。また、『延喜式』神名帳に載っている神社名としては、大和国宇智郡に丹生川神社、同国吉野郡に丹生川上神社、同国宇陀郡に丹生神社、伊勢国飯高郡に丹生神社と丹生中神社、近江国伊香郡に丹生神社、若狭国遠敷郡に丹生神社、同国三方郡に丹生神社、越前国敦賀郡に丹生神社、越後国古志郡に小丹生神社、但馬国美含郡に丹生神社、紀伊国伊都郡に丹生都比女神社がある。

このように多数の「丹生」地名が古代に存在したことが知られるが、これらの中で東歌の地域に所在するのは上野国甘楽郡丹生郷（現在の富岡市北西部）のみである。この歌は国名不明の部に収められてはいるが、上野国の歌である可能性が高いと考えられる。

「真朱」は、古代に用いられた朱色の顔料。赤土。辰砂。上二句は「色に出」を導くための序詞。

「言はなく」「恋ふらく」の「く」は「ク語法」と呼ばれ、動詞・形容詞・助動詞などを名詞化する用法。「～すること」という意味になる。上代には盛んに用いられたが、平安時代になると使われなくなり、今日では、「曰く」「恐らく」「老いらく（の恋）」などに化石的に残るのみとなった。「言はなく」は「言はず」のク語法で、「言わないこと」。「恋ふらく」は「恋ふ」のク語法で、「恋していること」。

男女いずれの歌とも取れる。万葉集巻十一に次のようなよく似た歌がある。

・白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ我が恋ふらくは（二七二五）

「白真砂」は「白い砂」で、「御津」に掛かる枕詞。「御津」は大阪湾にあった港で、「大伴の御津」「難波の御津」などとも呼ばれた。「埴」は黄赤色の粘土で埴輪などの材料。「埴生」は埴のある場所。

「丹生の真朱の」の歌と比べると、一句目と二句目とが異なるだけで、三句目以下は全く同じである。一句目・二句目も、「枕詞＋地名＋（黄）赤の土」という全く同じ構造をしている。偶然の一致とは思えないので、丹生の真朱の歌は、御津の埴生の歌（あるいはさらに別の類歌）を改作したものと考えられる。丹生の真朱の歌には東国方言は含まれていないので、この改作は東国に下ってきた都人の手によるものかもしれない。

市川亀次郎改め
四代目市川猿之助襲名披露

松竹大歌舞伎

日　時　7月22日（月）
　　昼の部13時00分　開演
　　夜の部18時00分　開演　開場は、開演の30分前
演　目　**毛抜口上義経千本桜**　川連法眼館の場
出　演　市川猿之助、市川右近　他
会　場　ベイシア文化ホール（群馬県民会館）大ホール
入場料　S席5,000円（昼の部S席完売）、A席3,500円
　　B席2,000円(同学生1,000円)、友の会割引有り
　　託児サービス有り（要予約500円）
着物を着て歌舞伎鑑賞・歌舞伎プレ講座・歌舞伎の舞台裏　開催

❖ 第37回県民芸術祭参加事業

オペラレクチャー
「知っておきたいオペラ20選」vol.6

だまされて「よかったー」と「最悪！」の二本立てだよ！

泉　良平

ウーロン亭ちゃ太郎

日　時　7月13日（土）
　　開演15：00（開場14：30）
演　目　ヴェルディ／オテロ
　　ドニゼッティ／愛の妙薬
出　演　構成・ナビゲーター／ウーロン亭ちゃ太郎
　　バリトン／泉　良平
　　ちゃ太郎・オペラ・カンパニー
会　場　ベイシア文化ホール（群馬県民会館）
　　小ホール
入場料　全席自由1,000円
　　（未就学児入場不可）

❖ 第37回県民芸術祭参加事業 －新進演奏家支援事業－

♩♬♩♪♩ グリーンコンサート2013 ♩♬♩♪♩

Opus1 “One Night Summer”

日　時　平成25年8月9日（金）18：30開演
出演者　ピアノ：石田佳奈、サクソフォーン：板垣貴子
　　ソプラノ：中野瑠璃子
会　場　群馬県生涯学習センター・多目的ホール
　　（前橋市文京町2-20-22　027-224-5700）
入場料　無料（要電話予約）

石田佳奈

板垣貴子

中野瑠璃子

メディア芸術推進事業

❖ 第37回県民芸術祭参加事業・メディア芸術推進オープニング記念事業

久石譲スペシャルオーケストラコンサート with 群馬交響楽団

久石　譲

日　時　平成25年11月24日（日）15：00開演（14：30開場）
会　場　ベイシア文化ホール（群馬県民会館）大ホール
出　演　指　揮・ピアノ：久石　譲　管弦楽：群馬交響楽団
曲　目　ワーグナー：ニュルンベルグのマイスタージンガー
　　久石　譲：天空の城ラピュタ、おくりびと、
　　魔女の宅急便、ハウルの動く城
　　ラームス：交響曲第3番
※都合により曲目を変更する場合がありますので、ご了承下さい。

　現代音楽や映画音楽で世界的に活躍している久石譲のピアノ演奏と群馬交響楽団のオーケストラによる初のコラボレーション。県民の幅広い年齢層の方々に生の音楽の素晴らしさと迫力と感動を体感していただくコンサートです。

入場料　全席指定（税込）S4，500円　A3，500円　B2，000円
　　※友の会割引はありません。
　　■一般電話先行予約　7月14日（日）8：30～17：00
　　℡027−232−1111
　　※先行予約時の座席指定はできません。
　　■窓口・インターネット販売　7月21日（日）8：30～
　　電話予約・郵送（代引き）は、翌日22日（月）8：30～受付。
※チケット郵送サービスがあります。（別途郵送料と代引き手数料がかかります。）
※インターネット販売でお申し込みになれます。

❖ 第37回県民芸術祭参加事業
　メディア芸術推進事業

第1回 GUNMA マンガ・アニメフェスタ

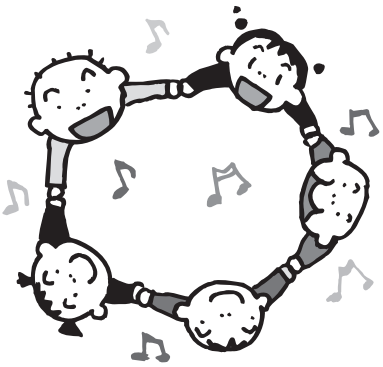
日　時　平成26年2月8日(土)
　　～11日(火・祝)
　　10：00～17：00
会　場　ベイシア文化ホール
　　展示室・小ホール　他
部　門　マンガ部門、アニメ部門

☆☆☆☆☆**募集期間**☆☆☆☆☆

平成25年10月1日(火)
　　～11月30日(土)
※ 募集内容等の詳細は、7月下旬に発表します。

賞　大賞1点賞状・賞金10万円
　　優秀賞2点賞状・賞金5万円
　　奨励賞6点賞状・賞金3万円
※ 小・中学生が入賞した場合は賞金ではなく図書カードになります。

地域文化をつなぐ



草津町文化団体協議会長
森谷武竝

草津温泉の文化活動とこれからの文化

草津町の文化的活動は、昔からいろいろな分野で個人、サークル等で芽吹いておりました。三十数年前の、昭和五十五年に五団体の集まりで、草津町文化団体協議会が結成され、現在では、三十一団体で、七百九十名を数える程の大きな協議会に成長してきております。団体部門の区分けとしては、文芸、手工芸が十四団体。自然が四団体。民族、芸能、音楽が十三団体、囲碁が一団体、科学が一団体となっていますが、この中で二団体が現在休会扱いとなっています。少子高齢化に伴いまして、各団体を見ても平均年齢が高く、若い世代の後継者が見つからず、苦慮しているのが現状です。休会をしている団体も会員の高齢化に伴い、活動不能の事態が起きて居るようです。今の社会は、会社経営が難しく、正規社員が成り立たなくて、臨時社員、俗に言う「アルバイト」でないと仕事に就けない、そして時間に制約があり、頑張ろうにも頑張れない。この様な状態では、生活も安定しないし、心も健康にならないと思われます。

将来に希望が持てて、生活もそこそこ安定し、心も安らいだとき、文化が芽生えるのだと思います。老いも若きも一緒になって、同じ趣味を堪能することが、自然であろう形と思います。私はアマチュア無線をしていて、クラブの活動が三十五年くらいに成ります。

当時の会員は、小学生から六十歳を超えてる方までおりました。クラブ活動で、白根山や、野反湖方面に、移動運用で、キャンプを計画し小学生や中学生の子供達をつれて、一緒に無線機の準備、屋外に空中線を張る作業をし、食事の用意などをする中で、子供と大人の交流が自然に出来て、友情が生まれ、信頼が生まれ、そして文化に繋がっていたのです。

当時は、草津中学校にも、アマチュア無線クラブが存在し、指導する顧問の教員も居て、一般の私たちも部活動の協力で、学校に出向き設備の整備、空中線等の作業を協力していました。そのうち教育方針が変化してきて、その様な交流が出来なくなってきた様に思います。

文化の芽は、子供の時代に創っておかなければ開花するのは難しい、これは総ての文化活動に対して言えるものでしょう。

そして特に大切にして行かなければならないもの、それは、地域に残る古典文化です。先人が残し継承して来たものを大事に引き継ぎ、次の世代に渡して行く事が現代人の勤めです。決してその時折の風潮、並びに私感で左右されて、形態を変えたり、亡くしたりしては、いけないでしょう。今の時代がいちばん文化に対して真剣に考えるべきとき。そして教育のあり方にも慎重に方向性を審議するとき。人間社会の中で文化は、必要不可欠のものだから、そのことにより、地域文化の発展に繋がるものと思います。

警告！地球人類に物事

近年世界において、表現の自由を課題とさせる芸術が生み出され発表されている。

しかし本当の自由表現であるのか、私としては実際疑問符が残ってしまう感じと受け取れるものばかりなのだ。それは、まず形及び色彩感に囚われ過ぎ、自己である本性感性が描かれず欠落して、他方（観る側）に合わせた作品を描いてしまっていることである。これらは正に残念至極、時代主体物質主義の似合わせの人類法則に翻弄されたものであり、その似合わせのモノが、本来の先駆け現し示す自体観念感性より分離分別されてしまい、作者の本来本性が作品から見えてこないのである。つまり現在に至るまでの絵画は、写実的並びに抽象的描写しか捉えていない。しかし本来は、そこに己の自己表現描写（感性感）を付け加え、伝達させ描ききるモノである。これが原形質であり、色彩を超え自己自体の宇宙感に変極させ、本来本性に至らせる証を創作させると言うことなのだ。だが、実情はまだ似たもの似せたもの製作で終わらせている。いわば本来、絵画とは観るという鑑賞劇（浅い嗜み）から、奥深い自然宇宙観を検閲するモノを与えねばならぬものであると思う。残念ながら人類は、頭脳（発達肥大物）などという複雑怪奇な現象物に操られている。しかしそれが素晴らしいことなのか不幸なことなのか、私としては後者の不幸を選任している。現代通常の人間感覚からすれば頭脳進化をとげ喚起の喜びと唱えるも、この脳進化現象は益々増派する情報伝達（悩み）をもたらし、肥大（脳バブル）を繰り返しやがては縮小簡素をヨギなくされるであろう。つまり人間本来の生き症たる最大の目的とは、時間形成過に於いて本当である己を表現し、自己に達することを最大のテーマとして生き描くことである。

さておき、私は四十年の年月を冒険家の端くれとして旅を続けてきた。それらは日本列島を縦断してから、アジア、ヨーロッパ、中東、オセアニア、アメリカ、南米と、すでに四十五ヶ国ほど彷徨い続けて今に至っている。これらの経験値こそ、現在の私を更として奮い立たせてくれる起爆剤なわけである。この第一章である旅の目的だが、当然として人類興味に引かれ、様々な人種と触れ合い互いの歴史文化を交流させてきた。しかし、人類分類（宗教、教則、イデオロギー）化の理解には興味の半面、融合は苦難を強いられた。つまり分割（人間人種の国の多様化）が、複雑怪奇に入り組み理解を遠ざけ過ぎた結果なのだろう。これに付随して食するものも民族様々な舌鼓を持っている訳で、これが世界を旅するものにとって、異文化食は常に口に合わずの場合いが多く、それを克服しないと民族探りの世界冒険旅行は難しい。しかし、この不味い食文化を体験慣れねば、付随した異文化並びに異質の人類と交流できない事も確かであり、超不味いは興味面白さが増すという事である。昨今の現状人類たちは人口増派計画の波乗り現象に従い、先進工業化を更に推し進めようと躍起になっている。この工業推進計画はすで止めようにも止まらない。たがこの先進と思われている利便の追及増派で、私たち人類を本当に幸せもたらしてくれるのだろうか?すでに、現時点の世界に散らばる人間の目的は、正に金、金、金の一極集中に囚われ本当本位の自身を見失ってしまった。だが、これも人口自然の便利追求の流れと受け止めれば仕方の無い事であろうが、その代償の付けが他を思いやる人情（心）を失わせてしまったのである。またこの現状の文明工業推進化たる化け物（想造創作ロボット過程）は、人類及びに地球自然生物全体に多大な弊害を及ぼしている。もしこれらの工業化が全地球を支配する破目に至れば、人類は早期に滅亡を余儀なくされる事になるであろう。正に今起こっている化石燃料の奪い合い工業化促進は、人類たちを地球至上より抹殺させてしまう早期計画とも思える行為に他ならない。だがまだ間に合うはずだ!それはいとも簡単であるハズの工業化文明を、これ以上推進しない事に尽きると同時に、便利さも追わない事なのだ。が、人間人類文明至上の現在欲たるモノどもは、蓄え増築を企み更なる地球壊しに取り掛かる事を掲げて今も止まらない。即ち、地球地上人類

たちは進化を過剰に脳肥大させ、その結果影響を大自然地球環境破壊に導いてしまうという事だ。これらの破壊現象はまだ序章に過ぎず、本物の本番破壊はこれから始まるはずである。またこれらの計画（自然破壊行為）は、人工知能計画の策略的実感（物質操作行為）に基づき実行されるモノで固体、液体、気体の混用にて実証実用されている。過去とする人類至上におき稀である操作想像粋での現在文明と実用科学文明化の更なる支配応用化は、代用とする地球破壊現象を益々とエスカレートさせ、人類たちがかつて経験し得なかった滅亡に向かって突き進んでいる。ゆえに、これを阻止するか進行させるかは現在人間人類意志の自由であるが、まずその前に一人一人が地球及びにそれを存在させておく原理である、宇宙大自然を学び得る意識の向上しか手だては無いと言える。ゆえに過去由縁に来た現在なる人間存在がこの先、生き延びられるかはあなた方の意識の変革方向に任せるしかない。ゆえに人類原理の行方は今損じて更なる先か、勇払して途絶えてしまうか二者択一を選ばねばなるまい。

　さてちょっと切り替え、ここで私と供する自我自然哲学論に話を切り替えてみる。何で私がこの話をするかであるが、今から数えて十一年前（二〇〇二年）の事、その頃私は哲学的密教学に凝っていた。勿論この前章段階より世界放浪の途中、不思議な事に文明過去（神儀）に導かれるように謎めき持って侵入していった。だがその頃の私は、神への信心者でもなければ道徳者でもなかった。しかし、何がそうさせたしか言いようがない。むさぶるように宗教地（インド、エジプト、チベット、中南米）などと徘徊を重ね過去の遺産寺院遺跡、また宗教教義などに興味を注がれた。しかし何を持って神か?何を持たせて宗教か?探れば探るほど私の理知より離れ、理解は混沌として謎めくばかりの印象虚無が頭に立ちこめた。何故なら、どの宗教教義並びに検索結果も私自身に付随しえなかったのである。この分析理由としたモノだろうが、私は子供の頃より生まれた地域の山岳自然に浸しみ、野山河を駆けずり回って野草や川魚を獲り自給自足に近い生活を嗜んでいた。勿論この暮らしは家が貧乏由縁であったからだが、田舎暮らしの自然気まま暮らしには自身として満足感に溢れるものであった。この自然観を供として、私は束縛されずの自分が出来上がったのである。しかしそのような質素な暮らしも、経済成長の著しい押し波に流され今は昔になってしまった感は否めない。増してこの日本におき、食べ物並びに華燭は列島を縦断させ群集を呑みこんでしまった。勿論先進国と言われる飽食の国々も同様を呈している。これらは余剰の要因の冴えたる証であり、それらの現象は心の破壊行為の証明そのモノとなっていくのでる。いや!もうなってしまった。残念ながらというよりも、これらは人間のもつ知性的性質の時代計略の一環であろう。が、現在地の示す物質過剰（人口過剰、情報過剰）、占領的現象は、当に地球一体ゴミ計画の一環と捉える事ができる。これらの文明異常を察して今、私はそれに従わない事をあなた方にお勧めしよう。人間史上過去なる教義観また法儀であるモノ、それはすで過去であった証しに過ぎず現存の現況に合うハズが無い。つまり不一致のモノである。しかし。存在を示してくれる大自然はまだ脈々と息づいている。これに気付き行き着いてわたしとする原理（大自然説）は、内なる秘めた人間至上の頭脳洗脳思考力が、あまりにも囚われすぎてチッポケなモノと思えてしまったのである。大宇宙と名づけてただ見上げるだけの銀河の星座、この大宇宙の卵の配列一世に、何で生まれて来たのか?何故に生まれてしまったのか!幸か不幸か知る由もない現状の生身の一体とは全体の隠れ蓑のようなモノではないか!知ろうが知るまいが私は生きる限り気まま気楽に、この地球時間計画の申し子の自然として、また徘徊貧乏乞食アーティストとして、これからも挑戦し続けて行くことが私の使命である。

タダならぬ乞食　きんとき星流

▶ 1953 年 群馬県碓氷郡横川村出身。学生時代、化学及び電気工学を専攻する。1974 年よりフォークグループを主体にした作詞作曲活動及びにライブコンサートを行い、日本全国を縦断する。1976 年 東芝乾電池に入社するも二年半で退社。これより自ら有機農法の野菜作りで自給自足を目指す。1980 年から日本全国また世界各地を放浪する。1986 年 海外放浪生活で学んだ英語を活用し、自宅にて英会話教室を始める。1998 年 小説出筆活動に専念。2002 年 初版本「虹の世の夢巻物」を刊行し続いて、2005 年「原生の太鼓」を出版。2009 年宇宙哲学「天空の証」を出版する。

▶画歴：2000 年出版本の挿絵を描いていたら自然に絵が浮かぶようになり画業になってしまった。

▶個展及びグループ展：富岡美術館、高崎市シティギャラリー、ギャラリーくぼにわ、新潟県池田美術館、碓氷峠くつろぎの里、エジプト・カイロ「パピルスの館」など。現在アートグループ「どじんじん」所属

カフェの隅から

小さな歓声

竹田朋子

最近、無性にお餅が食べたくなる。

お正月につき、冷凍しておいたものは既にないので、物産店に走り、まだ柔らかいお餅を購入してくる。

フライパンに、サラダ油を少々ひいて焼き、仕上げにおしょうゆを回し入れ、熱々を口に運ぶ。と同時に、それがストンと吸収され、即、体の一部になっていくような気がする。体が要求しているようだ。

私は元来、パン党で、三食パンでも平気だったが、数年前から、ご飯がおいしい、と思えるようになった。いえ、ご飯を食べなくてはいけない、と気づかされたのだ。お米を推奨する本の影響かもしれない。

そのご飯をとび越えて、お餅を欲するのは、いまの私の体に必要な食べ物だからだろうか。

お餅には、ほのぼのとした思い出がある。

四十年も前、寮生活をしていた高校生の頃、お餅切り当番、になった。文化祭の前日、模擬店で使うために朝ついたお餅を、夕方切り分けるのだ。

作業終了後、担当の教師が、砂糖しょうゆの入った器を、おもむろに取り出した。小さな歓声と共に、切れ端をそれにつけてこっそり食べた。

厳しかった寮生活。その一室で、数人の寮友と密やかに口にした行為が懐かしい。

もうひとつの光景は、我が子たちだ。幼かった頃、夫の生家にご年始に連れていくと、義母は決まってお餅を焼き、砂糖しょうゆをつけて出してくれた。喜々として頬張る子どもたちの姿を、目を細めて見守っていた義母の笑顔は、自分が孫をもつ身になったいま、新たな感慨と共に甦る。

お正月、お節句、祝事につくお餅。弥生、端午の節句は既に過ぎたが、迎える七夕、重陽の節句に合わせ、今年二度めのお餅つきを厳かに、とりおこなうことにしよう。

竹田 朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

レストラン 伊万利ダイン
前橋市文京町 2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL 天坊

政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬

味わいの旅

——四つの食事処で料理が選べる

想いを“かたち”に。

株式会社 藤田ビジネスプロモーター

前橋市問屋町 1-1-1 TEL 027-251-4455 (代) FAX 027-253-0057
http://fujita-biz.co.jp/ E-mail fbp-npo.spirit@k5.dion.ne.jp

戸建からレジデンス ペットとくらす アパ|マン

大小店舗オフィス 倉庫工場 店舗|事務所

個人から法人 建物|土地

不動産有効利用 不動産活用

ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

住宅ローン「金利選択プラン」
選べる魅力で快適な住まいづくり

マイカーローン
自動車の購入・車検等に

教育ローン「仕送り名人」
入学金・授業料・仕送り費用に

住宅リフォームローン
ご自宅の増改築・補修・改修費用に

「ナイスサポートカード」カードローン
ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能

フリーローン「おまとめ太郎」
ご返済をまとめて一本化

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。
群馬銀行ダイレクトセンター
0120-139138 受付時間 9:00～20:00
土・日・祝休日、12/31～1/3は除きます。

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

編集後記

◇梅雨が明けたら、どんな季節になるでしょうか？その問いに私ならこう答えます。「枝豆とビールが一番似合う季節」と...。
今では、いつが旬だか分からないほど、一年中多くの野菜が売られていますが、やはり茹でた枝豆をつまみにするなら今でしょ!! ということですね。
最近は、冷凍食品の枝豆もありますが、絶妙な茹で加減と塩加減で調理された新鮮なものが絶対いい。
そんな考えは、今や、ちょとしたわがままのように思われるかもしれませんが、ささやかな楽しみとして、今年もしっかり、味わいたいものです。（ＮＨ）

◇本誌希望の方は、送料（140円×希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事　大澤正明

ⓒ 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化
●第134号 ●平成25年5月25日発行（年4回発行）●発行人 福島金夫
●発行所 〒371-0801 前橋市文京町二丁目20-22 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www. gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目18-7